38

思春期の子どもの離村で生じた中山間地域の保護者の不安と対応

長鶴美佐子[1)]・坂元夏美[2)]・大野理恵[1)]・長友　舞[1)]

key words：中山間地域，思春期，離村，保護者，不安

Ⅰ．はじめに

中山間地域の中学生は，心身の変化が大きい思春期に，高校進学のために保護者のもとを離れる。この時期は性への関心も高まる時期でもあり，親元を離れ，新たな環境に身を置く子どもたちには，性教育をはじめとする「自己の心身を大切にし，セルフケアできる」思春期の健康支援がより必要とされる。我々はこの観点に立ち，学校側とともに中山間地域の思春期健康支援を実践しながら，中山間地域という特性を踏まえた具体的な支援のあり方を検討しているが，その方向性を十分見出すには至っていない。これらの検討においては，子どもの生活に深く関わる保護者の視点が必要であろう。

中山間地域の保護者に関する研究は，育児支援による学生の学び[1)]があるのみで，思春期の子どもを持つ保護者に関する研究は皆無に近い。中山間地域の中学生の性行動や性意識は全国平均とほぼ変わらない[2)]との報告もある中で，中山間地域という地域に住む保護者は，思春期の時期に離村を余儀なくされる子どもに対して，どのような不安をいだき，どのような対応をしているのであろうか。これらを明らかにすることは，中山間地域の思春期健康支援の検討においては重要と考え本研究に取り組んだ。

Ⅱ．目　　的

思春期の子どもが高校進学で離村した経験をもつ中山間地域の保護者の不安と対応を明らかにする。

Ⅲ．方　　法

研究デザインは半構成的面接法を用いた質的帰納的研究である。

研究参加者は，A 県の中山間地域の三カ所の村に居住する，子どもが高校進学で離村した経験を持つ 30～50 歳代の保護者 21 名（男性 13 名）である。この保護者の子ども数は平均 2.9±1.0 人，調査時点で，離村した子ども数は平均 1.9±0.7 名，男子が 43％であり，子どもの年齢は 15～25 歳であった。また全員が車で約 2～3 時間を要する高校に進学し下宿や寮生活をしていた。

データ収集期間は平成 30 年 3 月～8 月であり，研究参加者の希望する職場や自宅等のプライバシーが確保できる部屋にて行った。分析では，まず許可を得て I.C.レコーダーに録音したデータを逐語録にした後，不安と対応が語られている文脈をデータとして抽出しカテゴリー化を行った。なお，カテゴリー化においては研究者間で一致を見るまで検討を重ねた。

本研究では，思春期健康支援を「思春期の子どもたちの健全な成長発達を促すための，思春期の特徴や心身の変化を踏まえた様々な健康支援で，具体的には，思春期教育・性教育・生活指導を含む健康教育などの支援（集団指導だけでなく個別指導も含む）」，中山間地域を「都市や平地以外の中間農業地域と山間農業地域の総称であり，本研究で扱う 3 村は，A 県の地域振興条例第 2 条に該当する村」と定義し用いた。なお，本研究で対象とした 3 村は人口 3000 人未満の村である。

Ⅳ．倫理的配慮

本研究の趣旨と研究への参加協力及び撤回の自由の保障，対象者の匿名性およびプライバシーの保護，研究成果の公表等を文書及び口頭で説明し，書面にて同意を得た。本研究は宮崎県立看護大学研究倫理委員会の承認を得た（承認番号第 14 号）。

Ⅴ．結　　果

以下，結果について，【　】カテゴリー，＜　＞サブカテゴリーで示し，保護者の語りを「*斜字*」で表した。

ながつる　みさこ　1）宮崎県立看護大学　2）宮崎県立宮崎病院

1. 保護者が抱いた不安

43データ，12サブカテゴリーから，保護者が抱いた不安は【人間関係】を築けるか，【日常生活】【学習面】【性的な面】【他者からの影響】は大丈夫か，【子どもの特性に伴うもの】の6つのカテゴリーが生成された。

【人間関係】（15データ）では，村の温かい人間関係の中から人とのつながりが薄いところにいくことや，同じ村人・同級生の中で育つため幼少時から人との関係性を築く体験が少ないことから，子どもが＜友達関係が築けるか＞との不安を持ち，また村の子はおとなしいため＜いじめにあうのではないか＞＜自分の居場所がつくれるだろうか＞と，離村後の新たな環境の中で人間関係を築けるかと不安を抱いていた。

「村の子は人付き合いを知らないですからね。もともと子どもが少ないところからいくので…いろんな人がいるじゃないですか，大きいところに行くと…。」

「村で育った子は…本人にとって温かい場所だったことから，いきなりつながりが希薄な場所にいくので…。」

また，【日常生活】（11データ）では，朝起きて学校に行くことができるか，身の回りの片付けはできるかなど自分一人で＜身の回りのことができるか＞と離村後の寮や下宿生活を想定した不安を持っていた。また，小遣いや生活費など初めてまとまった金額を持つため＜金銭管理＞ができるかについて不安を持っていた。

「下宿なので自分でちゃんと起きて，時間割とかして，忘れ物とかないようにできるのかと…。」「村では子どもたちもお金を使う機会があまりなく，必要なものがあると親にいって買ってもらう感じで…，親たちも町に出かけたときにいっぱい買うというお金の使い方をしている。村では計画的に使うという生活環境ではないので…。」

さらに，【性的な面】（6データ）では，＜男女交際＞が活発になることと，それに伴う＜性的トラブル＞についての不安を持っていた。

「村では小学校からずっと一緒なので，恋愛の機会はなかなかなくて高校にいってからになってしまうんで…様々なトラブルは当然起こるだろうし…。」

「表立っては言えないけど…，子どもが部活をやっているうちはいいけど，部活が終わって余裕ができたときに，性行動に関しては心配になりますね…親元を離れていますし…。」

その他の不安として，親の目が行き届かなくなることで自己管理ができず【学習面】がおろそかになることや，村を出て様々な考えに触れることによる【他者からの影響】，さらに子ども自身が抱える身体的，精神的，性格的な問題から生じる【子どもの特性に伴う不安】を持っていた。

「いろいろな人の考えに触れて…対立するのではとか，わが子がどんな風な影響を受けるのかとか，染まったりするのではないかとか。人は楽な方に行くので…親元を離れていると特に。」

2. 保護者の対応

保護者の対応では52データ，13サブカテゴリーから【愛情を注ぐ】【子どもの自立を促す】【支援体制の構築】【子どもとの交流】【様々な問題への対応】の5つのカテゴリーが生成された。

離村前は，いずれ迎える離村を意識しながら十分な【愛情を注ぐ】（5データ）ことに心掛け，子どもの＜メンタル面の強化＞や＜日常生活力の獲得＞等の【子どもの自立を促す】（20データ）関わりがなされていた。

「一生分の愛情を離村するまでの間に注いであげるというのをいつも思ってやっていました。」「村はあったかいし…，また家族ぐるみの学校でしょ。温室で育てられているようなもの。そこからポーンと出ていくと挫折が…うちは剣道で鍛えて，離村前に挫折みたいな厳しさを体験させたし，そして，自分の自信となるものをしっかり持たせるようにしました。」「男の子でしたが，寮に入ったことを考えて掃除・洗濯・アイロンがけ・茶碗洗いなど全部やらせていました。」

また，離村時から離村中にかけては，縁故関係などを活用し＜支援を依頼する＞＜親戚や知人の存在を子どもに知らせる＞など【支援体制の構築】（6データ）を行っていた。

「進学先にいる自分のきょうだいに，いつも，何かあったら助けてもらうように頼んでいましたね。」「進学先にいる知り合いに，今度子どもが行くんだよって話をして…子どもにもこういう人がいるからねっていって…もし困った時は駆け込めと…。」

そして離村中は，定期的に＜子どもと会う＞ことや電話やメールなどで＜子どもとの会話＞を持つなど【子どもとの交流】（12データ）を心がけていた。

「都市部の親よりも部活の試合の応援などに出ていき，子どもとの接点を持っていました。」「帰ってきた時にたくさん話をして，子どもの変化と精神的に参っていないかどうかの見極めをしていました。」

また，【様々な問題への対応】（15データ）では，＜病気への対応＞＜性に関する対応＞＜うまく生きる術を教える＞＜他の保護者から情報を得る＞＜金銭感覚を身につけさせる＞などがあった。

「生理用品は必ず私が買ってやるようにして，少なくなれば補充する形で…，減らないということは問題があるということ…私はそこを一番，気をつけていました。」「性行動については自分が責任とれるようにならないといかん…間違ったことだけはするなと…。」「おかしいと思ったら逃げてもいい，勇気を持って逃げなさい…友達じゃないといわれたらそれでいいと伝えました。」

Ⅵ. 考　　察

1. 中山間地域の保護者の不安

今回明らかになった【人間関係】【日常生活】【性的な面】など中山間地域の保護者が抱いた不安は，子どもが進学で自宅を離れる経験をする一般の保護者にも共通するものであり，中山間地域特有のものとはいえないだろう。しかし，中山間地域という「限られた人々の小さな集団で育った」という子どもの特性を考えたときに，中山間地域の保護者の不安は進学先への適応において一般の保護者よりも，より深刻さを持つものであると考えられた。

中でも，今回，15 データという数が示すように多くの保護者が不安として挙げたのが【人間関係】に関するものであった。中山間地域の子どもたちは，幼少時からお互いを十分知り尽くしている村人との関係性の中で育つために，様々な考えを持つ人と新たな人間関係を構築する経験が少ない。このような成育環境の特徴を保護者は十分認識し，さらに自らの離村経験や上の子の離村体験などと重ね合わせ抱いた不安と考えられた。成育環境の特徴からくる不安は，離村後の子どもの【日常生活】における＜金銭管理＞でも見られた。それは，村では子どもがお金を使う場や機会が少なく，計画的にお金を使う経験が乏しいがゆえに生活費としてまとまった金額を持たせることへの不安として表出されていた。

思春期に高まる性的関心により生じる【性的な面】の問題も不安として挙げられていた。この【性的な面】の不安も中山間地域の保護者に限ったことではなく一般の保護者も抱くものである。しかし，中山間地域の保護者の不安は，性的関心が高まる時期に，保護者や村人らが日々見守る環境から，保護者の行き届かない，しかもより性的刺激を受けやすい環境に身を置くことを案じる結果生じたものであり，より深刻さを伴うと考えられた。

また，【他者からの悪影響】も同様の状況で抱く不安と考えられた。思春期は，様々な人々と出会い影響を受けながらアイデンティティを確立していく大切な時期[3]であるが，その影響は様々である。この保護者の不安は「染まったりするのではないか」という言葉に代表されるように，子どもが村という狭い世界から出て様々な考えに触れて受ける悪影響を案じたものであろう。

以上より，中山間地域の保護者の不安は，子どもが保護者から離れ初めて経験する大集団での生活への適応に関するものであり，そこには，「中山間地域での子どもの育ち」がもたらす諸問題を想定し生じているという特徴があると考えられた。

2. 中山間地域の保護者の対応

保護者は避けることができない離村を想定した準備を行い，様々な出来事を想定した対策を取っていた。その内容は，先に述べた不安に対応するものが多く，離村前は日常生活力を獲得できるように，また大集団の学業生活で挫折を味わっても対応ができるようにメンタル面を強化することであり，心身両面からの【子どもの自立を促す】ものであった。

離村時及び離村中には，縁故関係を活用した【支援体制を構築】し「何かあったらここに」と親のみならず子どもにも安心感を与える対応がなされていた。これは，近年の通信や交通手段の発達で子どもへのアクセスが容易な環境であるが，やはり，何かあったら即座に対応できない「地理的距離の長さ」を意識した対応と思われた。

さらに離村中は，常に子どもとの連絡を欠かさず，定期的に会いに行く，部活の応援に行くなどして【子どもとの交流】を心掛けており，その内容・程度は保護者の信念や教育観により異なるものがあった。思春期の子どもが一人の人間として成長して行く上では，「情感のある交流」が必要とされており[4]，このような中山間地域の保護者の【子どもとの交流】は，離村により小集団から大集団での生活を余儀なくされる思春期の子どもにとっては重要な意味を持つと考えられた。

【様々な問題への対応】では，子どもの特性がもたらす問題等も含め，個別に生じた問題に対しての対応がなされており，特に人間関係の問題では，子どもに合わせた具体的なアドバイス等がなされていた。

性行動に対する対応では，性的トラブルについて触れ，責任ある行動を取るように話した保護者や，生理用ナプキンの補充で娘の体調を把握するとした保護者がいただけであり，懸念は示すものの具体的な対応は行なわれていない現状があると考えられた。中山間地域の子どもたちは，小さな集団で幼いときからきょうだいのように育ち男女交際の経験が少ないという特徴がある。その一方で，インターネットなどの普及により中山間地域でも性情報が入手しやすい状況にあり，さらに離村でより性的な影響を受けやすく，性行動が取りやすい環境に身を置くことになる。これらを考えるとき，離村前からの性教育は重要となるが，保護者の性教育への関わりは不十分とされており[5]，今後，学校・保健医療関係者・保護者が連携してそのあり方を検討することが望まれる。

本研究では，子どもの離村経過年数にばらつきがあり，対象者の想起において限界があったことは否めない。また，結果には，中山間地域以外の保護者も抱くと思われる不安も含まれていたが，先行研究がなく中山間地域特有のものかどうかの検討ができていない。

しかしながら，今回明らかにした保護者の不安や対応は，中山間地域の子どもたちの思春期健康支援を検討する上で貴重な資料になると考える。

Ⅶ. 結　　論

保護者の不安は，中山間地域で育った子どもの特性がもたらす影響を心配したものであり，その内容は保護者から離れて初めて経験する大集団での「人間関係」構築や「性的な面」での不安，「日常生活への適応」に関連したものであった。また，その対応として，離村前から「子どもの自立を促す」関わりがあり，離村時には「支援体制の構築」，離村中は「子どもとの交流」等が行われていた。

なお，本発表に関し開示すべき利益相反はない。

引用文献

1) 高尾茂子，古城幸子，竹崎和子：中山間地域における「子育て親子ふれあいサロン」づくりを体験した保健師課程選択学生の学び，インターナショナル Nursing Care Research，17（3），p.47-55，2018.
2) 西頭知子，佐々木くみ子，末原紀美代：過疎地に住む中学生の性行動と性意識に関する調査研究，母性衛生，53(1)，p.81-88，2012.
3) 野中利子：思春期のより良い親子関係―心おきなく子育てを卒業するために―，星和書店，p.6-7，2005.
4) 文部科学省編集：思春期の子どもと向き合うために，ぎょうせい，p.36-39，2001.
5) 石沢敦子，矢島まさえ，佐光恵子，他：思春期における子どもの性教育のあり方（その1）中学校3年生の家庭における性教育の現状と課題，群馬パース学園短期大学紀要，6（1），p.3-11，2004.